

Title	インドネシア語における「アクセント」の特殊性
Author(s)	中西, 龍雄
Citation	大阪外国語大学学報. 11 p.81-p.97
Issue Date	1962-03-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80198
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

インドネシア語における「アクセント」の特殊性

中 西 龍 雄

Keistimewaan „tekanan” dalam bahasa Indonesia

Nakanishi Ryuo

Kata Pengantar

Dalam mempelajari bahasa Indonesia biasanya „tekanan” tidak dipentingkan, kalau dibanding dengan tatabahasa. Mungkin hal itu terjadi, berhubung karena bahasa Indonesia mudah dimengerti, walaupun tidak tepat tekanannya.

Akan tetapi sebenarnya tekanan bahasa Indonesia tidak begitu mudah dipahami, hal mana dapat dibuktikan dengan kenyataan bahwa paham sardjana atas tekanan bahasa Indonesia berlain-lainan baik dalam pribadi tekanan maupun dalam tempat jatuhnya tekanan, disebabkan karena teorinya tidak sesuai dengan praktis. Ada sardjana yang mengadakan temporaal accent, selain dari dynamisch accent dan muzikaal accent, sedang lain sardjana menjangkalnja, ditilik dari segi phonetiks. Begitu juga tentang tempat jatuhnya tekanan, paham sardjana tidak tetap, ada yang mengakui tempat jatuhnya tekanan pada suku kedua dari belakang, ketjuali suku itu mengandung vokal lemah, ada juga yang mengakui tempat jatuhnya tekanan itu pada suku yang akhir.

Dengan mencari sebab-sebabnja maka hal yang sedemikian itu terjadi, saja mentjaba mengadakan persatuan paham atas tekanan bahasa Indonesia yang tidak tetap pengertiannya, seraja memperbandingkan hasil penyelidikan ilmiah yang ditjapai sardjana² bahasa Indonesia. Memang penyelidikan yang bersahadja ini adalah tidak memuaskan, tetapi kalau penyelidikan matjam ini dapat mengingatkan penjelidik bahasa Indonesia akan pentingnja tekanan untuk diselidiki baik dari segi praktis maupun dari sudut phonetiks, maka dapat dikatakan tugas penyelidikan ini telah terlaksana.

インドネシア語では、アクセントの研究は語の構造や接辞法と同様、ゆるがせに出来ない重要な問題の一つである。しかしインドネシア語のアクセントは、その性格においても、また形式においても、実相を捉えがたいということや、「意味アクセント」を含まないということなどによ

り、実際的にはアクセントが正確でなくても、思想伝達のうえにおいて、西洋語ほど大きい支障を来たさないので、とかく軽視されがちである。

従来我が国で出版されたインドネシア語文法書においては、いずれもそのアクセントについて、満足すべき説明が与えられていない。しかも、その多くは「微弱」であるとか、「日本語のアクセントに似ている」と言うような極めて曖昧にして、且つ常識的な言葉をもって表現されており、複雑なインドネシア語のアクセントの真の姿を、これらの簡単な説明をもって、理解することは不可能であると言わねばならない。

たしかにインドネシア語のアクセントは、これを語音の「ひびき」即ちその性格からみると、日本語のそれによく似たものがあり、D. Gerth van Wijk¹⁾ のように、*kleurloos* <色合いのない>であるが、他方これをその形式、即ちアクセントの位置よりみた場合は、もちろん一定の法則のもとに定まったタイプを設定することは可能であるけれども、どのように可能なタイプにおいても、それにあて嵌まらないものが頗る多い。言い換えれば、説定され得るアクセントのタイプは、いずれも実際に則していない面をもっているわけである。これをアクセントそのものの見地より考えてみると、インドネシア語のアクセントは不定で、極めて明確性に乏しいということになる。

そうであるからと言って、もちろんインドネシア語では、アクセントを軽視してもよいという理由にならない。殊に H. J. E. Tendeloo²⁾ が、その著 *Maleische Grammatica* において指摘している如く、インドネシア語はオランダ語やドイツ語、英語などと異り、文法上の約束に基づく文の形態のみをもって、文中における語の機能を判断することが出来ない言語である。従って口語においては、文中における語の機能は文中における語のアクセント、即ちイントネーションにより判断しなければならない。

このような見地からすると、インドネシア語におけるアクセントの研究は、頗る重要な意義をもつものと言わねばならない。

インドネシア語におけるアクセントの重要性は、オランダ人インドネシア語学者によりはやくより認められていた。周知の如くインドネシア語の研究は、語学的な意味においても、また言語学的な意味においても、オランダがもっとも進んでおり、その発端を十九世紀中葉にもとめることが出来る。

現在のインドネシア語文法体系は、オランダ人インドネシア語文法学者によりつくられ、その基盤のうえにたって、戦後インドネシア人インドネシア語学者が、これを充実発達せしめたものである。就中インドネシア語のアクセントについて、インドネシア共和国が独立して以来、統一解釈が為されるようになったのも、一にかかって、Ch. A. van Ophuysen, H. J. E. Tendeloo,

D. Gerth van Wijk, Spat C., C. A. Mees, A. A. Fokker その他多くのオランダ人インドネシア語学者による語学的乃至は音声学的研究の成果によるものと言えよう。

尤もこれらオランダ人インドネシア語学者のインドネシア語アクセントに対する考え方は、インドネシア語のアクセントの性格や形式はどのようなものであるか、言い換えれば、インドネシア語のアクセントはどのような種類のアクセントに属するものであるか、そしてまた、そのアクセントは語を構成するいずれの音節におちるかということについても、必ずしも同じではなかった。

ただ共通するものがあると言え、それはただ一つ彼等は勿論、他の大部分のオランダ人インドネシア語学者も一様に、インドネシア語のアクセントを表わす場合、オランダ語のアクセントを表わすのに用いる “*klemtoon*” <音勢>という語を用いていることである。

この “*klemtoon*” というオランダ語の意味は、通常「アクセント」と日本語に訳されるが、それが意味するものは「強勢」、即ち英語でいう “*stress*” である。従ってオランダ語のこの “*klemtoon*” という語は、明らかに西洋語のアクセントに見られる「強さ」を意味するものであり、また先に述べた我が国でよく言われる「微弱」という言葉は、「強弱」に対する程度を示すにはかならない。

そうであるとしてみれば、多くのオランダ人インドネシア語学者や我が国のインドネシア語研究者が考えているインドネシア語のアクセントは、「強さアクセント」であるということになる。

インドネシア語のアクセントは、はたして「強さ」を表わすアクセントであると言えるであろうか。

1) D. Gerth van Wijk, *Spraakleer der Maleische Taal*, 1909, P. 45.

2) Dr. Mr. H. J. E. Tendeloo, *Maleische Grammatica 2de druk* 1901 P. 131,

2

数多い戦前のオランダ人インドネシア語学者のうちで、これに対する明確な回答を与えることが出来るものは、インドネシア語のアクセントについて、深い関心をもつ極めて少数の学者に限られ、大抵のものはその位置、すなわち語を構成するいずれの音節にアクセントがおちるかについては、よく研究しているけれども、そのアクセントはどのような性格をもつものであるかについては、あまり深くほり下げて考えていないように思われる。

Spreken en Zingen, 1928 をみると、その著者 Eldar³⁾ はインドネシア語のアクセントを *dynamisch accent* <強さアクセント>⁴⁾、*muzikaal accent* <高さアクセント>⁵⁾ 及び *temporaal accndt* <長さアクセント>⁶⁾ の三種類に分け、オランダ語のアクセントを表わすのに用いられる “*klemtoon*” というのは、このうちの *dynamisch accent* にあたることを明らかにし

ているが、音声学的にみて上に述べた Eldar の分類が正しいとか、そうでないとかいうことは別問題として、インドネシア語におけるアクセントの本質にたち入って、このように研究を進めているものは極めてまれで、C. A. Mees⁷⁾ や Spat C.⁸⁾ をはじめ、オランダ人インドネシア語学者の多くはインドネシア語のアクセントを表わすのに“*klemtoon*”という語を用いているけれども、彼等はいずれも、この“*klemtoon*”というのは、インドネシア語にあっては、どのような内容をもつアクセントであるかを明らかにしていない。

殊に A. A. Fokker⁹⁾ の場合は、他のオランダ人インドネシア語学者と同じように、やはり“*klemtoon*”という語でインドネシア語のアクセントを表わしているばかりでなく、「インドネシア語の“*klemtoon*”は、オランダ語のそれに較べて遙かに弱く、殆んど感じられないくらいである」と明確に述べているところよりして、Fokker はもちろんのこと、Mees や Spat など大抵のオランダ人インドネシア語学者は、一般にインドネシア語のアクセントは、どのような性格をもつものであるかを考えるまでもなく、インドネシア語のアクセントはオランダ語のアクセントと同じ“*klemtoon*”，すなわち「強さアクセント」であるとして疑いをいれなかったものと考えられる。

ただ Gerth van Wijk¹⁰⁾ は *Spraakleer der Maleische Taal* において、「インドネシア語のアクセントは、音節を強めたり、または音節を高めたりすることだけではなく、音節を長く発音することにより生ずる」と述べているが、これは前述の Eldar の表現を、解り易く言ったに過ぎないであろう。

インドネシア語のアクセントを表わすのに、Gerth van Wijk も“*klemtoon*”という語を用いているけれども、Mees や Fokker その他多くのオランダ人インドネシア語学者と異り、彼の言う“*klemtoon*”という語の中には、たしかに *dynamisch accent* <強さアクセント>、*muzikaal accent* <高さアクセント>及び *temporaal accent* <長さアクセント> の三要素を意識していたものと思われる。これら三要素のうち *temporaal accent* については、更に音声学的検討を加えねばならないが、Eldar や Gerth van Wijk が、インドネシア語のアクセントは強さアクセントだけを意味するものではないということを明らかにした点は注目すべきである。

インドネシア語における *temporaal accent* の存在について、Gerth van Wijk と同じ考え方をしているものに、インドネシア人インドネシア語学者である Soetan Moehammad Zain¹¹⁾ がいる、彼はその著 *Djalan Bahasa Indonesia* において、インドネシア語のアクセントは、長く発音することにより生ずるということを明らかにしている。

これは明らかに Eldar のいう *temporaal accent* を肯定したものと言えるであろう。しかし Zain は Eldar のように *dynamisch accent* や *muzikaal accent* にはふれていないから、彼の

いう“*tekanan*”＜アクセント＞は、Mees や Fokker その他多くのオランダ人インドネシア語学者のいう“*klemtoon*”と同様、*dynamisch accent* を意味するものと解される。

この *dynamisch accent* を意味する“*klemtoon*”という語を、多くのオランダ人インドネシア語学者がインドネシア語のアクセントを表わすために用いて、何等異議をはさまなかったのは、不知不識の間に自国語であるオランダ語に用いられるアクセント、即ち *dynamisch accent* をインドネシア語にあて嵌めて考えていたことによるものであろう。

ここに戦前の多くのオランダ人インドネシア語学者が、インドネシア語のアクセントについて、おかしていた誤謬があると言わねばならない。

しかし Eldar や Gerth van Wijk, Zain などのインドネシア語学者は、*dynamisch accent* を軽視してもよいというのではなくて、インドネシア語においては特に、*temporaal accent* をアクセントの要素の一つとして、考える必要があるというのである。

- 3) A. M. Eldar, *Spreken en Zingen*, 1928, P. 74.
- 4) *stress accent, dynamic accent* (E), *der Druckakzent* (G), *tekanan dinamik* (In).
- 5) *pitch accent, musical accent* (E), *musikalischer Akzent* (G), *tekanan tinggi* (In).
- 6) *tekanan waktu, tekanan tempo* (In).
- 7) C. A. Mees, *Beknopte Maleische Grammatica*, 1931, *tweede druk*.
- 8) Spat C., *Maleische Taal*, 1916, *derde druk*,
- 9) A. A. Fokker, *Beknopte Maleische Grammatica*, 1941, *eerste druk*, P. 18.
- 10) D. Gerth van Wijk, *Spraakleer der Maleische Taal*. 1909, P. 45.
- 11) Soetan Moehammad Zain, *Djalan Bahasa Indonesia*, 1943, *tjetakan pertama*, P. 17.

3

それでは Eldar により呼ばれている *temporaal accent* というのは、どのようなアクセントを意味するのであろうか。

dynamisch accent ＜強さアクセント＞や、*muzikaal accent* ＜高さアクセント＞については、音声学において、音波の振動による物理学的見地からも、また社会慣習における現象としての角度からも、明確な説明がなされている。しかし、音の時間的な長さをアクセントの一種、即ち *temporaal accent* ＜長さアクセント＞として、少くとも音声学的に試みられた説明は見当らない。

Eldar はアクセントをその発生要因よりみて、*dynamisch accent* は呼気の強さによるものであり、*muzikaal accent* は音の高さによるものを言い、また *temporaal accent* というのは音時量によるものであると述べている。

このうち *dynamisch accent* と *muzikaal accent* は、一応これを問題外におき、*temporaal accent* は音時量により生ずるというのは、どういうことを意味するのであろうか。

これは恐らく音時量が、音の「強さ」や「高さ」に与える影響を指しているものと考えられる。言い換えると、これは音の高さ乃至は強さと音時量との交渉における協調関係を意味するものであって、音声学的にはアクセントとは言えないではないか。

このように考えてみると、Eldar のいう *temporaal accent* というのは、少なくとも音声学的には筋道をたてることが困難である。しかし理論的にはともかくとして、実際的な面からインドネシア語のアクセントを明らかにする場合、便宜的に *temporaal accent* を、「強さアクセント」や「高さアクセント」と同じように設けた方が、より明確にインドネシア語のアクセントの在り方を把握せしめることが出来るように思われる。この実利性を尚ぶというわけでもないであろうが、Eldar のインドネシア語におけるアクセントの考え方を支持する学者が、就中戦後のインドネシア人インドネシア語学者の間において、かなり多くいるということも事実である。

いま、そのうちの主なものを二、三あげてみると、Armijn Panè¹²⁾ は Eldar と同様、インドネシア語における「強さ」、「高さ」及び「長さ」などの各アクセントの存在を認め、*Mentjari Sendi Tatabahasa Indonesia* において、*dynamish accent* は呼気圧の増減により、呼気力が調整されることにより生じ、*temporaal accent* は呼気を多少とも延長することにより、音時量に変化が齎されて生ずる。また *muzikaal accent* は音の高さの転換により生ずると述べている。

これはどのようにしてアクセントが生ずるかということについて、Eldar よりも詳しく説明しているけれども、*temporaal accent* については、音声学的には解決されていないものと見て差支ないであろう。

戦後インドネシアで出版された多くのインドネシア語文法書のうちで、内容的に優れたものの一つとして、*Tatabahasa Baru Bahasa Indonesia* がある。その著者 S. Takdir Alisjahbana¹³⁾ はインドネシア語のアクセントに *tekanan dinamik* <強さアクセント>、*tekanan tinggi* <高さアクセント> 及び *tekanan waktu* <長さアクセント> の三種類のアクセントがあることを認め、これらのアクセントが如何なる場合に生ずるかということについて説明しているが、彼の場合はこれらのアクセントを、文中における語のアクセントとして考えている。

インドネシア語のアクセントについて、*Takdir* と同じような考え方をしているものに Zainudin Husin Idris¹⁴⁾ がいる。彼はインドネシア語の *irama* <リズム> を *tekanan kalimat* <イントネーション> と *tekanan kata* <アクセント> に大別し、*tekanan kalimat* を *tekanan tinggi* <高さアクセント>、*tekanan tempo* <長さアクセント> 及び *tekanan dinamik* <強さアクセント> に分けている。一方 *tekanan kata* に関しては、Takdir と同様その位置については説明しているが、種類についてはふれていない。

これは Takdir にしても, Idris にしても, インドネシア語のアクセントの性格は, これを単独の語について考えるよりも, 文中における語について考えた方が, 実際的に理解が容易であると考えたからであろう。

12) Armijn Pané, *Mentjari Sendi Baru Tatabahasa Indonesia*, 1950 P. 79.

13) S. Takdir Alisjahbana, *Tatabahasa Baru Bahasa Indonesia*, 1953, *tjetakan ke-7*, djilid I, P. 21-23.

14) Zainudin Husin Idris, *Gramma Indonesia*, 1957, djilid I, P. 21-23.

4

このようにオランダ人, インドネシア人を問わず, インドネシア語学者で音声学的にはともかくとして, Eldar の説を支持し, *temporaal accent* <長さアクセント> の存在を肯定するものが多いけれども, 他方においては Eldar の説を否定し, インドネシア語のアクセントの中に, *temporaal accent* の存在を認めない学者もいることは見逃せない事実である。

インドネシア語における *temporaal accent* の存在を否定する学者には, H. J. E. Tendeloo や Ch. A. van Ophuysen がいる。

Tendeloo¹⁵⁾ は Eldar がいう *temporaal accent* と称するものは, *slepende* <より延引せる>であって, アクセントではないことを明らかにしている。彼によると, 母音の長さはアクセントに関係がない。それ故, 長い母音の音節には, 必ずしもアクセントがあるとは限らないというのである。

これは明らかに Gerth van Wijk や Zain の説と相反するもので, これらの学者は音節を長く発音することにより, *temporaal accent* が生ずると考えているわけであるが, 音声学上よりみて, 音の高さ乃至は強さと, 音の長さとの協調関係は常には成立つとは言えない。場合によっては低い母音が長く発音されることも少くない。

こう考えてみると, 母音の長さはアクセントに関係がないという Tendeloo の説の方が, 理にかなっているものと言えよう。

この Tendeloo の考え方はまた, インドネシア語のアクセントとしては, *dynamisch accent* <強さアクセント>も存在するが, *muzikaal accent* <高さアクセント> が大きく表面にあらわれ, 音の長さはこれらのアクセントには殆んど影響がないとする Ophuysen の説¹⁶⁾ と概ね一致している。

Ophuysen によると, 如何なる種類のアクセントがよく表面にあらわれるかは, 言語如何によるもので, ある言語では, *dynamisch accent* を重視するものもあれば, またあるものは *muzikaal accent* が大きく表われたり, 音時量を必要とするものもある。インドネシア語においては

muzikaal accent が大きく表われているが、その *muzikaal accent* においては *dynamisch accent* が重要な要素になっているというのである。

そこで、上に述べてきたインドネシア語学者のインドネシア語アクセントに対する考え方を総合すると、(1) インドネシア語のアクセントは “*klemtoon*” <音勢>である。(2) インドネシア語のアクセントは *dynamisch accent*, *muzikaal accent* 及び *temporaal accent* より成る。(3) インドネシア語のアクセントは *dynamisch accent* 及び *muzikaal accent* より成るが、*temporaal accent* は存在しない、の三種類に大別することが出来ると思う。

このうち (1) のインドネシア語のアクセントは、*klemtoon*, 即ち *dynamisch accent* であるというのは、オランダ人インドネシア語学者が、自国語に用いる “*klemtoon*” という語を自覚しないままに、インドネシア語に用いたものであるから、これをもって直ちにインドネシア語のアクセントとはし難い。

また、(2) のインドネシア語のアクセントは、*dynamisch accent*, *muzikaal accent* 及び *temporaal accent* より成るという説は、既に明らかにしたように音声学のうえからは、このうちの *temporaal accent* を認めるわけにはいかないけれども、実際面からインドネシア語のアクセントの性格を容易に理解せしめるため、特に音声学上言われる音の高さ乃至は強さと音時量の交渉における協調関係をさして、これを *temporaal accent* と呼んでいるものと解すべきであろう。

最後の (3) は、インドネシア語のアクセントとして、*temporaal accent* を認めないという説であるが、元来アクセントは音節を長く発音することにより生ずるものではない。言い換えれば、音の高さや強さと音時量との交渉における協調関係は、これをアクセントと見做し難い。従って音声学的には *temporaal accent* を否定する Tendeloo や Ophuysen のインドネシア語のアクセントに対する考え方の方が正しいと言える。

それで、結局インドネシア語のアクセントは *dynamisch accent* と *muzikaal accent* よりなることになるが、Ophuysen の言う如く *muzikaal accent* が大きく表面にあらわれ、音時量を必要とする場合が少なくないと言えるであろう。

15) Dr. Mr. H. J. E. Tendeloo, *Maleische Grammatica*, 1901, 2de druk, P. 51.

16) Ch. A. van Ophuysen, *Maleische Spraakkunst*, 1915 2de druk, P. 57.

アクセントの研究に当っては、それがどのような性格をもつものであるかということと並んで、どのような形式をもつものであるか、言い換えるとアクセントがどの音節にあるかということは、

頗る重要な問題でなければならない。殊にインドネシア語においては、アクセントの位置は先に述べたその性格よりも、更に一層多くの複雑な問題をもっているが、これはインドネシア語の辞書には、アクセント符号を用いていないという事実によっても想像出来るであろう。

尤も西洋語では、たとえばオランダ語の如く辞書にアクセント符号を用いていないものもある。しかしオランダ語の場合は、定められた法則に従って発音すれば、アクセント符号をつけなくても誤ることなく正確に発音することが出来るので、アクセント符号をつけなくてはならないという必要性は認められない。

インドネシア語の辞書においてアクセント符号が見られないのは、オランダ語の辞書の場合とは異り、その符号をつける必要性がないからではなくて、どうしてもアクセント符号を用いることが、困難な理由がほかにあるからである。

インドネシア語では、オランダ語の如く同じ音節構造の語に共通するアクセント形式を見出すことは困難である。そのうえ語根に接辞が添加されることにより、語根にある本来のアクセントの位置が、他の音節に移動するばかりでなく、語が文中に來た場合におけるアクセントの移動する度合いが大きい。とりわけ同じ音節構造を有する語に共通するアクセントの法則を、うちたてることが困難であるという事情が、辞書にアクセントの符号を用いることを不可能にしているものと考えられる。

しかしアクセントが民族社会の言語上における習慣の所産である以上、たとえ蓋然的にもその位置について、定まった方向がなければならない。

Tendeloo¹⁷⁾ の *Maleische Grammatica* によると、インドネシア語の音節のうちには、常により多く *nadruk* <音勢>がおかれる音節がある。そしてその音節は開音節であると閉音節であるとを問わず、通常語を構成する音節の終りから二番目にあたるが、もしその終りから二番目の音節が弱性低母音 *e(ə)* よりなるか、または弱性低母音 *e(ə)* を含む場合は、アクセントは終りの音節におちることになる。

この Tendeloo の説を実際的な面からみて肯定しているが、理論的には終りの音節を重視するものに、Mees と Fokker がいる。

Mees は、その著 *Maleische Grammatica* において、インドネシア語のアクセントは、終りから二番目の音節が弱性低母音 *e(ə)* を含むか、または弱性低母音 *e(ə)* よりなる場合は、終りの音節におちるが、そのほかの場合はすべて終りから二番目の音節におちると述べている。彼はまたインドネシア語では、詩歌の吟誦において終りの音節にアクセントをおくことや、*ibu* <母>、*bapak* <父>などの如き若干の語は、これを呼称詞として簡略にいう場合は、終りから二番目の音節を省いて *bu*, *pak* というが如きは、明らかにインドネシア語本来の性格としては、終りの

音節に重点がおかれていることを意味するもので、アクセントがおちる箇所としては、当然この音節を重視しなければならないということを指摘している。

Fokker¹⁹⁾ も概ね Mees と同様の 見解をとっているが、既に述べたように “*klemtoon*” という語の意味するアクセントの性格についてはふれていない。

ただ、ここで断っておかなければならないのは、1957年 Mees²⁰⁾ により上梓されたインドネシア語版 *Tatabahasa Indonesia* においては、インドネシア語のアクセントは *tidak tetap* <定まっていない>であると修正が加えられている。これは著者がその後の研究により、インドネシア語におけるアクセントのおちる位置について、考え方が変わったので訂正したのであろうが、インドネシア語のアクセントは、単にその性格のみならず、それがおちる位置についても、如何に実相を捉えがたいものであるかを示すものとして、注目に値するものがあるであろう。

Gerth van Wijk²¹⁾ も Tendaloo や Fokker と同じように、インドネシア語のアクセントは原則として、終りから二番目の音節におちるという説をとっているが、終りの音節にアクセントが来る場合もあることを認めている。終りの音節にアクセントが来るのは、どのような場合であるかという、Gerth van Wijk によれば、それは主として終りから二番目の音節が弱性低母音 e(ə) を含む場合か、さもなくば *matanja* <彼の目>の如く、終りから二番目の音節が開音節である語に接尾辞を附加した場合である。終りから二番目の音節が閉音節である場合を除外したのは、接尾辞を附加しても終りの音節にアクセントが来るものもあれば、来ないものもあり、一定していないからであろう。

17) Dr. Mr. H. J. E. Tendaloo, *Maleische Grammatica*, 1901, 2de druk, P. 29.

18) C. A. Mees, *Maleische Grammatica*, 1931, tweede druk, P. 27.

19) A. A. Fokker, *Beknopte Maleische Grammatica*, 1941, eerste druk, P. 56.

20) Dr. C. A. Mees, *Tatabahasa Indonesia*, 1957, *tjetakan keenam*, P. 45.

21) D. Gerth van Wijk, *Spraakleer der Maleische Taal*, 1909, derde druk, P. 64.

6

これらのオランダ人インドネシア語学者は、いずれも原則的にインドネシア語のアクセントは終りから二番目の音節にあるという考え方にたっているが、弱性低母音 e(ə) が終りから二番目の音節に来ると、アクセントは終りの音節におちるとするのは、明らかに母音の高低(強弱)関係からアクセントをみたものであり、また *ibu* <母>、*bapak* <父> などの語を呼称詞として簡略化する場合は、*bu*、*pak* などの如く終りの音節が残るから、これらの音節を重視しなければならないというのは、語の構造のうえからみてそう言えるのである。

こう考えてみると、母音の高低関係や語の構造は、いずれもインドネシア語のアクセントの本

質的な在り方に、重大な役割を演じているように思われるので、はたして母音の高低や語の構造はアクセントと関係があるか、どうかを考察してみよう。

元来インドネシア語の単語においては、原則として一つの基本的な意味があり、これとの関連性においてその単語はまた、派生的に多く意味をもつけれども、日本語やオランダ語の如く、同じ語でもアクセントを変えることにより、他の異なる意味になるということはない。若し同一の語で意味を異にする場合は、固有のインドネシア語でなく外来語である。

このように考えてみると、インドネシア語では自然的な母音の高低関係そのものが、アクセントとして素直に表われているという可能性が大きい。ただこの場合音時量の影響により、音質に変化が生ずることも考慮に入れておかなければならないであろう。

母音の高低により音節の高低を測るためには、まず母音の高低差を示す基準がなければならない。Eldar²²⁾のインドネシア語母音の分析によると、音の高い母音から低い母音へ *ie, e, i, è, ê, a, à, ò, ó, o, u* の順に配列されるが、これらの母音を基本母音のみからみると、音の高い母音から *i, e, a, o, u* の順に高低関係が成立することになる。

インドネシア語におけるアクセントの基底をなすと考えられる音節の高低関係の蓋然性を探るために、上述母音の高低関係をインドネシア語の単語にあて嵌めて考えてみると、終りから二番目の音節に含まれる母音が終りの音節の母音より高い場合は、*bisu* <啞> の如く母音の高低原則に従うものもあれば、*nāsi* <飯> の如く従わないものもある。それでは終りから二番目の音節の母音が終りの音節の母音より低い場合は、どうなるであろうか、これも *bukit* <丘> の如く、母音高低の原則に従うものと、*pāgi* <朝>、*tidur* <眠る> の如く従わないものもある。終りから二番目の音節の母音と終りの音節の母音が同種である場合を考えてみると、*ini* <これ>、*ada* <ある> などは、終りの音節の母音よりも終りから二番目の音節の母音の方が幾分高いけれども、*dapat* <獲得する、出来る> の如きは、終りから二番目の音節の母音よりも終りの音節の母音の方が高い。

これらの例により明らかな如く、インドネシア語の音節の高低関係は必ずしも母音の高低原則に従うものではなく、音時量など他の客観的条件が加わって、母音が語を構成する音節の中にはいると、音の低いものが高くなったり、同じ母音でも一方が高くなるという現象がおきる。

Eldar や Gerth van Wijk は母音に音時量が加わって生じた音質の変化を称して、*temporaal accent* <長さアクセント>と呼んでいるわけであるが、*bukit* や *dapat* の場合のように *bu* や *da* に音時量が加わっても、必ずしも音質に変化を来さないものもあり、音時量のみを重視するわけにはいかない。

それで、こんどは語の構造関係からインドネシア語のアクセントを考えてみよう。

本学学報7号所載「インドネシア語の構造について」において、既に明らかにした如くインドネシア語の語根は、有意味音節に接辞音節が添加して構成されているか、さもなければ、有意味音節同士の合成によるものである。有意味音節に接辞が加わって出来た語にあっては、接辞音節は機能のうえからみて附属的役割をはたすに過ぎないから、アクセントは当然有意味音節におちるものと考えられる。例えば、*kuku* <爪>は語の構造よりこれを見るときは、*kuk* <屈曲>に接辞音節 *u* <品詞設定及び節化機能>が添加されたもので、その形式は *kuk-u* となり、アクセントは *kuk* におちるわけである。しかし語学としての音節形式は *ku-ku* と変り、語の構造上の音節形式は破れて新しい音節が生れる。そしてこの新しく生れた語学上の音節により、音の高低（強弱）関係や音時量が考えられることになる。また有意味音節同士をもって合成された語にあっては、ともに対等の立場に音節がおかれるわけであるから、双方の音節に含まれた母音の高低（強弱）関係やこれに影響を及ぼす音時量のほかには、アクセントが決定される要素となるべきものはみられない。

このように考えてみると、語の構造はあまりアクセントには関係がなく、むしろ Eldar や Zain などが主張する音時量の方が、インドネシア語のアクセントに大きい影響を及ぼしているものと考えられる。

Tendeloo, Gerth van Wijk その他多くのオランダ人インドネシア語学者が、インドネシア語のアクセントは、終りから二番目の音節に弱性低母音 *e(ə)* が含まれる場合は、終りの音節におちるが、それ以外は終りから二番目の音節におちると考えたのは、母音の高いものや、音の高さ（強さ）に音時量加わって音質に変化を来たしたものが、終りの音節よりも終りから二番目の音節に多いという事実に基いたものであろう。

22) A. M. Eldar. *Spreken en Zingen* 1928. p. 45.

7

ここで考えなければならないことは、インドネシア語のアクセントは原則として終りから二番目の音節にあるという考え方は、はたしてインドネシア語本来のアクセントの姿を、表わすものであるか、どうかということである。

周知の如くインドネシアには、80有余の種族が住んでおり、その多くは固有の言語をもっている。例えばジャワ族にはジャワ語があり、メナンカバウ族にはメナンカバウ語がある。またバタック族にはバタック語があるというように、有力な種族にはいずれも、それぞれ生れながらにして母語があり、インドネシア語はこれら各種族の共通語であるから、彼等にとっては第二義的な言語であると言わねばならない。従って彼等がインドネシア語をもって話す場

合は、当然その第一義的な言語であるところの彼等が所属するそれぞれの種族の言語のアクセントにより、多かれ少かれ影響をうけるものと考えられる。

一方また、インドネシア語自体がマレー語を中心として、ジャワ語、メナンカバウ語、スンダ語、その他インドネシアにおける文化的に有力な多くの種族の言語は勿論のこと、サンスクリット、アラビア語、オランダ語、ペルシャ語、英語などをもって構成されているという事実を考えると、インドネシア語アクセントの位置を決定する要素の一つとして、これらインドネシアにおける各種族の言語のアクセントや外来語のアクセントが、インドネシア語のアクセントに与えている影響を等閑視することは出来ない。

このような見地から、インドネシア語内の単語相互におけるアクセントの在り方について、比較研究するにとどまらず、インドネシア語と他の種族の言語を比較することにより、終りから二番目の音節にアクセントがおちるとするのは、はたしてインドネシア語本来のアクセントの在り方を示すものか、どうかを知ることが出来ると思う。

Ophuysen²³⁾ はこのような観点に立ち、母音の高低関係について、各種族語の比較研究を進め、Tendeloo や Mees 或は Fokker などとは異り、インドネシア語は終りの音節にアクセントがあるという結論を出している。

Ophuysen の結論をひき出すためには、まずマレー語を中心として、各種族語に共通する同種の語を比較することから始めねばならない。

マレー語 *ada* <ある>は、メナンカバウ語では *ado*, ジャカルタ語では *ade*,

マレー語 *dapat* <獲得する>は、ジャワ語では *dapet*, バタック語では *dapot*.

マレー語 *balas* <報復する>は、ジャワ語では *bales*, バタック語では *balos*.

マレー語 *rumah* <家>は、ジャワ語では *omah*, スンダ語では *imah*.

マレー語 *padi* <籾>は、ジャワ語では *pari*, スンダ語では *pare*.

上にあげた各種族語を、母音の高低原則によりそれぞれ比較してみると、母音 *a* を含むマレー語の終りの音節は、バタック語では *o* となっている。即ち終りの音節を下げて発音するのであるが、この場合の音は強く押しつけるように発音されるので、Zain はこれを称してアクセントと呼んでいる。しかし音の高低からすれば、バタック語は終りから二番目の音節にアクセントがあり、終りの音節に含まれる母音の高さはマレー語の方が高い。

メナンカバウ語の場合もバタック語と同様、終りの音節に含まれる母音は *o* であるから、マレー語の方が高くなっているが、アクセントは終りから二番目の音節におちる。

ジャカルタ語では、メナンカバウ語やバタック語と異り、終りの音節に含まれる母音は、マレー語のそれより高いか、同じであり、そのアクセントは終りの音節にある。

マレー語をジャワ語やスندا語と比較してみると、終りから二番目の音節の母音は、ジャワ語では *o*、マレー語では *u* であるからジャワ語の方が高く、またスندا語では *i* であるから更に一層高くなっているといえる。一方終りの音節の母音は、ジャワ語、スندا語では共にマレー語のそれより高いか、同じで、アクセントは終りの音節にある。

もちろんここに用いた各種族の単語は、それぞれの種族語におけるアクセントの在り方のすべてを代表するものであるとは言えない。より正確な結論を出すためには、より多くの種族語からより多くの語をとり出して検討してみなければならない。ただ此処では研究方法の一端を明らかにするために、インドネシア語としてもっとも多く用いられている代表的な種族語をあげたわけである。

こう考えてくると、蓋然的ではあるけれども、結論として各種族語のアクセントは、あるものは終りから二番目の音節にアクセントがあり、あるものは終りの音節にアクセントがあるなど各種族語においてそれぞれ実相を異にし、一様でないということと、マレー語の終りの音節の母音は若干例外もあるが、概ね他の多くの種族語の終りの音節の母音よりも高いところにあるということ、すなわちインドネシア語の母胎であるマレー語では、他の多くの種族の言語よりも、終りの音節に重点がおかれるということの二点を取り出すことが出来ると思う。

Takdir²⁴⁾ は *Tatabahasa Baru Bahasa Indonesia* において、インドネシア語では *sadar* <覚醒する>を *sedar* とし、終りから二番目の音節の母音 *a* を弱性低母音 *e(ə)* に換えて用いられることや、*baharu* <新しい>を *baru* とし、一般に終りから二番目の音節を省いて用いるほか、人名や人を呼ぶ場合 *Ahmad* <アハマツト>を *Mat* <マツト> と言い、*abang* <兄さん>を *bang* <兄さん>というように、終りから二番目の音節を省くことも許されるが、このような一連の現象は、いずれもインドネシア語のアクセントは終りから二番目の音節になく、終りの音節を重視しなければならないことを意味するものであると述べ、Ophuysen の考え方が正しいことを裏付けている。

このようにインドネシア語では、終りの音節にアクセントがあるという考え方は、戦前では Ophuysen、戦後では Takdir や Munaf をはじめ、多くのインドネシア人インドネシア語学者により支持され、今日に到っている。

23) Ch, A. van Ophuysen, *Maleische Spraakkunst*, 1915, 2de druk, P. 59.

24) S. Takdir Alisjahbana, *Tatabahasa Baru Bahasa Indonesia, tjetakan ke-77*, djilid I, P. 25.

25) Husain Munaf, *Tatabahasa Indonesia*, 1951, djilid, II *tjetakan kedua*, P. 130.

そこでインドネシア語のアクセントは如何なる場合にも終りの音節におちるとする Ophuysen

や Takdir の説を、インドネシア語のアクセントは原則として終りから二番目の音節におちるが、終りから二番目の音節に弱性低母音が含まれる場合は、終りの音節にアクセントが来るという Tendeloo や Gerth van Wijk, Fokker などの説と比較してみると、結論としてはこのように対照的な二つの結果が出ているが、考え方としては同じで、いずれも各種族語の影響を認め、これを考慮にいれて結論を出しているという点においてはかわりがない。ただ前者はインドネシア語の母胎であるマレー語のアクセントの影響を高く評価しているのに反し、後者は各種族語やその他外来語の総合的影響を重視しているものと言えよう。

実際的な見地からすると、例外も多いが、一般的にみてインドネシア語のアクセントは、終りから二番目の音節におちるとする Tendeloo の説に従っているように思われる。このもっとも大きな理由としては、既に明らかにしたように音の高さや強さに音時量が変わって、音質に変化を来たして高くなったり、強くなるものが終りから二番目の音節に多いことに因るものであるが、どうしてインドネシア語においては、音時量が終りから二番目の音節に加わるものが多いかというと、それは主として社会慣習によるものであるという以外に説明がつかないであろう。そしてこの社会慣習の形成には、インドネシア語の場合単に各種族語、即ち地方語の影響だけではなく、オランダ語の影響が大きく作用していることを忘れてはならないと思う。

一方インドネシア語のアクセントは、如何なる場合にも終りの音節にあるという Ophuysen や Takdir の説は、これを実際的な面からみると、必ずしも彼等が考えているようにはいかない場合が多い。それはどうしてであろうか。

この問題について考えるまえに、インドネシア語のアクセントは終りの音節にあるという Ophuysen や Takdir の考え方の理論的根拠が、妥当性をもつものであるか、どうかということについて考えねばならない。

インドネシア語のアクセントは終りの音節にあるという考え方の根拠として、Ophuysen や Takdir はインドネシア語においては、(1) 終りから二番目の音節の母音を、終りの音節の母音に較べて低い母音におき換えることが出来るものがあること、(2) 終りから二番目の音節を省くことが出来るものがあること、(3) インドネシア語の母胎をなすマレー語の終りの音節の母音は、他の種族語のそれに比し高いところにあるということなどをあげている。

このほかにも、インドネシア語には、例えば *tempat* <場所>、*sempat* <余暇>などの如く、弱性低母音が終りから二番目の音節に含まれる語は見られるけれども、終りの音節に弱性低母音を含む語は存在しないということも、終りの音節にアクセントがあるという理由の一つとして、あげることが出来るであろう。

このように考えてみると、理論的には Ophuysen や Takdir の考え方の方が、妥当性に富ん

でいるように考えられるけれども、終りから二番目の音節の母音を、終りの音節の母音に較べて低い母音におき換えることが出来る語は、はたして本来のインドネシア語であるかどうか、語の由来が問題になる。

さらにまた、若干の語にあっては終りから二番目の音節の母音が、終りの音節の母音に較べて低かったり、或いは終りから二番目の音節を省くことが出来るからといって、インドネシア語全体のアクセントが、終りから二番目の音節ではなく、終りの音節にあると決めてしまうことは聊か行過ぎではなからうか。殊にインドネシア語には既に述べたところにより明らかな如く、アクセントを異にする極めて多くの各種族語や外来語が混入している事実を考え合わすとき、早急に結論を出すことは困難であろう。

このように Ophuysen や Takdir があげているインドネシア語のアクセントは終りの音節にあるという考え方の理論的根拠については、一応筋道がたっているけれども、これを実際的にみた場合は多くの問題点を孕んでいるということが解る。

しかし、それにも拘らず、どうして彼等はインドネシア語アクセント「最終音節説」を主張するのであろうか、

それは恐らく理論とか、実際とかいう問題を超えて、インドネシア語のアクセントを、それが母胎とするマレー語のアクセントに準拠せしめようとするものにはかならないであろう。言い換えれば、マレー族の話すマレー語のアクセント本来の姿において、インドネシア語のアクセントを考えようとするもので、これはインドネシア共和国独立以来、続けられて来たインドネシア語からオランダ色を一掃し、インドネシア語をインドネシア語本来の姿にかえそうとする動きとも合致するものと言えよう。

このインドネシア語をインドネシア語本来の姿にかえす運動と並行して、近年インドネシア語とマレー語を統一し、これを一体化しようとする動きがあることも事実である。

しかし、インドネシア語とマレー語とでは、語の意味においても、また語法においても、大きい隔たりがみられるという事実よりして、たとえインドネシア語はマレー語に母胎をもつとは言え、その発達過程において既に新しい性格をそなえるに到ったアクセントを、マレー語本来の姿にもどそうとするところに、Ophuysen や Takdir の説に無理があり、実情にそぐわないものが感じられるわけである。

尤もインドネシア語のアクセントは原則として、終りから二番目の音節にあるという Tendeloo の説も、実情に則しているとはいえ、個々の語について考えてみると、法則にあて嵌らないものも多い。

これは Tendeloo にしても、また Ophuysen にしても、異った由来をもち、異った性格を有

する語を、西洋語の場合のように一つの定まったタイプにあて嵌めて考えようとするから、このような現象が生ずるわけで、より実情に則した結論を得るためには、各種族の言語や外来語の影響を考慮にいれつつ、インドネシア語のアクセントを、音の強弱、高低及びこれに対する音時量の影響などを基底として、より多くの可能な形式を、より科学的な手段と方法で探求しなければならない。